**土生重次**

**自選句　２**

砂こぼしつづく砂利山おぼろの夜

屋上の稲荷ひと隅下萌ゆる  
春塵を虹でおさへて撒水車

葉ざくらや石の背かはく川の中  
若葉風ひとゆれで発つ小海線

風薫る道にのりだし荒物屋  
青嵐なかなか鳴らぬ神の鈴

梅雨寒の電光ニュース咲き昇る

緑蔭を抜けて寡黙にもどる妻

墳山を水攻め代田水を張り

咲ききつて音のしたがふ遠花火

ひたぶるに互ひを照らし篭蛍  
滴りや器となりしたなごころ  
全集の一冊さかさ三鬼の忌

七月の耳よりも冷え耳かざり

日盛や鸚鵡の瞼下より閉ぢ  
ひとすぢの爛脈を背に青蟷螂  
羅に帯しめて消ゆ畳み皺  
夏ゆくや薄埃吐く麻袋

子のぬけしあと母が埋め踊の輪

初あらし木の折れ口に木の匂ひ　　　　　流灯の振り返らぬは父に似て　　　　　　八方に風をひろげて芒原　　　　　　　　猫の瞳の縦の一筋黄落期  
冬の燈に糖をいぶらせ甘栗屋　　　　　　点かぬ電球まじへホテルの聖誕樹　　　　木枯や焼鳥屋火を荒づかひ　　　　　　　去年今年針を進めて五分ほど　　　　　　灼け土を舞はせて象の芸をはる　　　　　夏の日を五彩に散らしタイ寺院　　　　　松過や出だしほどよき下座囃子　　　　　その影のゆれゐてゆれぬ大枯木　　　　　ひびくだけひびき体育館の咳　　　　　　受け唇に粒ほどの紅夫婦雛  
箸紙を箸の枕に春ともし　　　　　　　　韮の香の俎板かはく男子寮  
サイレンを谺がへしに山笑ふ  
夕暮れてなほ日の余燼花菜畑　　　　　　琴の譜に母の朱書や土用干　　　　　　　さくらんぼ茎まで冷えてをりしかな　　　甚平を着てたよりなき膝頭  
いまだ名のつかぬ木橋に蝸牛　　　　　　死してなほ兜のおもき兜虫　　　　　　　耳朶に灯の透きし夜店の白兎　　　　　　揚花火星になれざる星ばかり　　　　　　マリンタワー登りて虹の端さがす  
掌をあてて塔の鼓動をきく晩夏　　　　　秋暑し尼の齢のはかられず 芋の葉の掌中の珠雨ひと粒 灯火親し跋から開く新句集 入船の水尾踏む出船雁渡し 帯締めて勝気のもどる一の酉 表紙みな女の笑顔文化の日 この村の仔細に通じ木守柿 遠きほど嶺の青みて十二月  
人波の淀めるところ暦売  
熱燗に舌あまやかす港町  
子の息に息ついで消す聖菓の火  
クリスマスケーキに毀れやすき星  
犬小屋に扉のなくてクリスマス 初鏡一畳で足る妻の城  
枯芦原風の発たせしもの光る 渡良瀬川の曲りてもなほ枯の中  
ひと目ごと玉をはずませ毛糸編む  
冬の灯のなかに働く理髪灯 蓮根掘つぎの一歩に刻かけて  
何事もなき水のこし鳰潜る 木の盆に水溜りそめ雪うさぎ 春寒の首さしのべて首剃られ　　　　　　　冴返る肋に残る打診音  
春浅し艪も舵もなき笹の舟　　　　　　　おぼろ夜の土の匂ひの蔵の街　　　　　　三鬼忌や眼こげざる焼魚　　　　　　　　引けば鳴る母の抽斗苗代寒　　　　　　　湖の際のきはまで青嵐　　　　　　　　　葉ざくらや茶断ちの母の志野茶碗  
竹皮を脱ぐ乱雑をはばからず　　　　　　サングラスかけて一人の景を得し  
水底を歩き疲れし昼寝覚  
落書きが紙幣にありて敗戦忌  
水足せば尾鰭の騒ぐ熱帯魚  
噴水の頂上同志打ちの水　　　　　　　　勢ふ火に脂をそそぎ青秋刀魚  
流星のあと新しき星生まる  
触れたくば触れよとまろむ芋の露 己が衣に身動きとれず菊人形 しぐるるや竹垣の竹三節ほど 波受けるたびにまろみて鴨の胸 指のぞく軍手を愛し焼藷屋  
焚火爆ぜ枯れざるもののうとまれる  
聖夜来る辞書に凭れる文庫本  
クリスマス金魚は底の石に倚り　　　　　初夢に朱房のラッパ吹きし父　　　　　　かくまでも汝を攻めしもの破芭蕉  
火に溺る願ぎごとあまた札納  
片脚をあげ凍てこばむ凍鶴よ  
水音に訊く紙漉の漉き加減  
声よりも歩み不逞に寒鴉　　　　　　　　小粒ほど福の歯ごたへ福の豆　　　　　　種の名を忘れし白き種袋  
太幹を上座ときめて花筵  
羽根づかひ揃へし二羽に風光る　　　　　　代田水張られ日ざしの落ちつけず　　　　　両の手に入るほどの尻天瓜粉  
縁起読む香水の香のうしろより　　　　　太宰忌や細巻の傘浜に刺し  
襟もとをしめてなほ透く薄ごろも  
二三粒欠け洗ひ上ぐ黒葡萄  
日焼して胡坐の似合ふ次女三女  
声かけて一ト手狂はす盆踊  
矢印に出会ひこれより花野道  
流燈のゆきずりに炎をたかめあひ  
乾きたる風にも濡れて花芒  
ひるがへるのみの一芸鳥威し 一粒が二つにわかれ芋の露  
コスモスや風も日差もしなやかに 神領やひかりを篩ひうろこ雲  
藁塚の背筋を通す汚れ棒  
木枯や折り目ただしき熨斗袋 門松や同じ門扉の新開地 背負ひたる闇ふり向かず浜焚火 寒柝の一打に闇を強張らす  
黒焦げの籾山の灰田に返す  
千手もて星をまさぐり冬欅  
黙考のときも鰭ゆる寒の鯉  
雪吊の雪待つ一筋づつの張り  
くれなゐの鯉の洗ひや春隣  
掛軸の達磨にはねて年の豆 どの絵馬も願ひの似たり地虫出づ  
風去りしあとさざ波のげんげ畑  
散らばりし子を目で数へ磯あそび  
包みたる葉のほろ苦き桜餅  
杭避けてより整はず花筏 青蛙目つぶれば張るのど袋 一廻りしてもとの絵の走馬灯 離れしは離れしままに蟻の列　　　　　　先導に逆らふ一羽稲すずめ  
露けしや憶えの星座目で結び  
置きかへても傾く茶碗みかん山